

## 随想

## 我慢できない現代人

（）豊かさに慣れたわがままな個性が日本人に定着したのか（）

(株) PPPC研究所 加藤 宏光

八月二十五日、テレビ朝日の朝のニュース番組（羽鳥慎一モニングショー）で『急増中「近所の騒音』どうやつて身を守る？』とのタイトルで騒音トラブルについての報道があつた。騒音の種類にはさまざまあり、とくに取り上げられたのは『騒音トラブルがもとで、近くの男性を車で引き殺そうとした六五歳の女性が逮捕された』というニュースである。

この騒動をもとに、近年の騒音に対する一般人の不快感が（騒音公害について）うんぬんされていた。近隣住人のクレームを避けるために、『無音盆踊り』（＝踊る人々はイヤホンを付け、音頭はイヤホンを介してそれぞれにだけ聞こえるため、会場は音

楽なしである）、『無音太鼓』（＝太鼓をたたいても音が出ない）、エアドラン等、基本的に無音の中での祭りの参加者は黙々と踊っているのである。この無音盆踊りはもう二、三年続いているという。それに慣れた人々に対してもいささかならずあきれる思いがするのは著者のみであろうか？！すでに一〇年以上も過ぎたのでは、記憶が定かでない方も多いとは思うが、平群（へぐり）騒音おばさん事件という騒動があった。平群町では、この事件をキッカケとして騒音防止に関する条例が制定されたのだそうである。条例によれば、七〇デシベル以上の騒音を出すことは条例の制限に引っかかるという。

七〇デシベルとは二、三離れたところで聞くセミの声だそうだ。セミといつてもニイニイゼミやヒグラン、ハルゼミのようなセミではないだろう。クマゼミ、アブラゼミといった、いかにも騒々しいモノでなければ、耳障りにはなるまい。また、騒音公害といえば、最近は『子供を叱る親の声』ですら騒音公害に含まれる、とコメントーターが言ふ。われわれ、戦中・戦後生まれ世代では及びもつかない感性である。この番組で語られる雰囲気からして、羽鳥アナウンサーをはじめとするコメントーターは、基本的には騒音公害は厳然とした社会問題である、といふ姿勢と受け止められた（騒音公害を認めるコメントーター

七〇デシベルとは二、三離れたところで聞くセミの声だそうだ。セミといつてもニイニイゼミやヒグラン、ハルゼミのようなセミではないだろう。クマゼミ、ア布拉ゼミといった、いかにも騒々しいモノでなければ、耳障りにはなるまい。また、騒音公害といえば、最近は『子供を叱る親の声』ですら騒音公害に含まれる、とコメントーターが言ふ。われわれ、戦中・戦後生まれ世代では及びもつかない感性である。この番組で語られる雰囲気からして、羽鳥アナウンサーをはじめとするコメントーターは、基本的には騒音公害は厳然とした社会問題である、といふ姿勢と受け止められた（騒音公害を認めるコメントーター）

個人の考え方について是非を問うのは、野暮というものかも知れない。しかし、「周りのヒトがすべて自分の思う範囲で行動して当たり前。そうでなければ裁判だ！」というのもどうかと思う（そうした意味で、マスコミの報道でこのような論調はいかがなものであろうか？）。佐藤愛子氏の著書に『人間の煩惱』というものがある（二〇一六年、幻冬舎より出版）。佐藤愛子氏が幻冬舎から出版した

過去の作品から、佐藤愛子氏が自選したエッセイ、小説より抜粋してまとめたエッセイ集である。九〇歳の佐藤愛子氏の生きざまや人生観が盛り込まれていて、流し読みしても面白い。さすがに九〇歳の経験をベースに記述される内容は広汎であるが、その中に『第四章 子供とは…』があるので、この部分を引用してみよう。

「日本人は、今は好き放題贅沢をしているけれど、今にどんな時代が来るか。やがては食糧難の時代が来ることは目に見えている。その時に困るのは贅沢に慣れた者たちだ。どんな時代が來ても、どんな境遇になつても、嘆かず騒がず順応出来る人間で育てておくのが親の責任ではないか。子供が欲しいといつても簡単に与えず、我慢させる。我慢の力があるかないかで、その者の人生が決まるのだ：」（『不敵雜記たしなみなし』）

「今の若者はすぐにキレるという。思い通りにならないと、

我慢ができないくなるのだろう。『わかる、わかるけど…』といふへッピリ腰の教育、今風にいふと、『思いやり教育』がすぐさまにキレる若者を作つたのだ』（『わが孫育て』）

ザッと読めば、もっともらしく受け止められよう。しかし、著書には違和感を否定できない。テレビ朝日がこの報道を企画した要因は『隣人の騒音にキレた女性の車による殺人未遂事件』であったが、逮捕されたのは六五歳の女性である。若者ではない。平群の騒音おばさんも若者というにはかなりの年齢である。そうだとすれば、キレるのは若者の特徴とはいえない。若者に限らず、今の人々に我慢ができない個性が定着してしまつているとしたら、日本全体の深刻な問題であろう。

高齢者をも含むすべての年代で我慢ができないヒトが増えていること自体、どうして？ である。もし、我慢ができないヒトが増えているなら、そうした人々は「自分の思い（欲望）が

かなつて当たり前」と信じているからとしか思えない。六〇年以上遠い昔となつてしまつた著者の子供時代には、日本はまだまだ貧しく、大人にとつても子供にとつても物質的には望んでも届かないことばかりであった。我慢が当たり前の社会が当然であつた。自分自身でも、欲求を精神的な満足に置き換えていたように感じる。

いつの間にか日本は、世界でもまれなほど物質的に豊かな国になつてゐる。余程大変なモノでなければ、大概のモノが手に入る。子供に限らず大人であつても、望めば何でも手に入ることに慣れてしまえば手に入らないことと自分が気に入らなくなってしまう。『世の中全体が自分の思うままにならないことに不満を感じてしまう、わがままな個性に変貌してしまつたのではないか？』と思うと、憮然としてしまう。

一方で、『台風で年寄りが転んで捻挫をした』といった日常茶飯事をテレビニュースで事細

かに報道される。視聴者にウケるトピックであれば、報道はエスカレートし、報道側の都合の良いところが強調され、執拗なほどに報道される。

騒音問題にしても、テレビで知る情報だけで判断するしかない。われわれが、社会問題を受け止めるに際して慎重でなければならない。

注…ちなみにインターネットで調べると、平群の騒音おばさんは一方的に悪人にされているが、最初に面倒を起こしたのは被害者とされる隣人で、宗教勧誘に対して断られた隣人が極端な嫌がらせをしたらしい。身体障礙者の子供や夫を世話していくたんだのおばさんが、重なる嫌がらせにキレて、あの騒ぎに発展した、というのが実態だとのこと。あの事件以降、被害者とされる隣人は騒動の原因をもとに周囲住人に厳しく当たられることで、引っ越しをし、おばさんは近隣住人と仲良く暮らし

ている。めでたしめでたし！！